第2次
漆ブームの立役者たち。

**バブルの時代、漆器はバカ売れした。
しかしバブル以降、人気は衰退。そして今また脚光を浴びる漆を、
現代の暮らしに生きる器にしたのは、感性豊かな作り手たちです。**

photo_Kazuya Morishima (p.86-p.87 & Yamaguchi's portrait), Shin-ichi Yokoyama (Yashiro), Nagahide Takano (Kirimoto & Yamaguchi's works), Hiroshi Iwasaki (Iwamoto's works)
text_Norio Takagi, Masae Wako (Yashiro & Iwamoto)　editor_Kazumi Yamamoto

椀
31,500円〜

右上／凹凸を付けた木肌を生かした「荒目椀」31,500円。右下・左／蓋の裏に蒔絵を施した「鹿蒔絵煮物椀」。蒔絵の図案は、染色家の望月通陽が担当した。各59,850円。

遊山箱
525,000円

数寄者が花見や行楽の際、お酒や弁当を入れて持参した遊山箱を再現。外箱の中に四角い酒注（右端）とお重のような5つの弁当箱が、きっちり入る仕組みになっている。

工房にて。下塗りを終えた作品は、塗師風呂と呼ばれる室（むろ）で乾燥する。

艶

やかという既存の漆のイメージとは違うマットな質感。フォルムも薄くてシャープ。「実にモダンで独特の表現ですね」と問うと、輪島在住の塗師（漆を塗る職工）赤木明登は、「いや、僕の仕事は自己表現ではない」と語った。

国の重要無形文化財に指定される漆器の産地、輪島にあって、赤木は、特殊な存在だ。26歳で編集者から転身。輪島に移住し修業を始めた、いわば外様である。32歳で塗師として独立するも、「輪島の伝統的な職人さんからはお前は作家だと言われ、漆芸家からは職人だと言われ、どちらからも否定された」と言う。

しかしバブル以降、衰退を続けた漆の魅力を、世間に知らしめたのは、ほかならぬ赤木だ。職人でも作家でもない。外様だから産地も背負っていない。そんな自由な立場でモノを作り、多くのメディアに登場し、漆の魅力を語る。編集者という出自が、モノ作りの面白さを語り伝える技術を身に着けさせたのだろう。むろん何より、作品自体が美しく魅力的だったから、メディアも取り上げた。

遅咲きの塗師は多分に勉強家だ。器の古典を探り、漆のルーツを求めた。たどり着いたのは金属器。「江戸時代の漆器には、口の外周を盛り上げる玉縁（たまぶち）と呼ばれる造形が残っていた。玉縁は、金属器の強度を上げるための技法。実は漆器は、金属器の代用品だった」

金属から漆へ。素材が変わっても形が連続している事実に興味を覚えた。赤木の椀が薄くシャープなのは、ルーツである金属器を模範にしようと考えたから。

「自分のオリジナルを模索し、主張するのではなく、形の美しさがどこから来ているのか、その根本にある普遍性を追い求めている。人の歴史の中で連綿と受け継がれた造形の流れに、自分の器がいかに入れるかが、大切」

冒頭で「自己表現ではない」と語った、これが理由である。

受け継がれる時代の流れに、自らの漆器を置く作業とは、実は現代の生活に合う漆器の模索。特徴的なマットな仕上がりは、「現代の明るい照明の下では、艶のある質感は似合わない」と考えたから。「暮らしの中で生きる器」を求める姿勢が、漆を身近に感じさせ、魅力を広めることにつながった。

一方で平安時代、朱塗りの器は天皇家専用であったように、漆は特別な存在であるとの思いも強い。「だからなぜ、特別なものであったのかも追求したい。無垢の木を用い、樹液を塗る。そこには自然の豊かな生命力があり、同時に優しさや柔らかさ、温かさがある。そんな漆器の素材が本来持っている部分を十分に引き出すことで、漆は特別な存在になると思う」

作家でも職人でもない。自己表現を拒否する塗師は、漆器の大きな歴史の流れに身を置いて、漆の魅力にただ、耽溺する。

上塗り用の漆は、吉野紙で念入りに漉す。

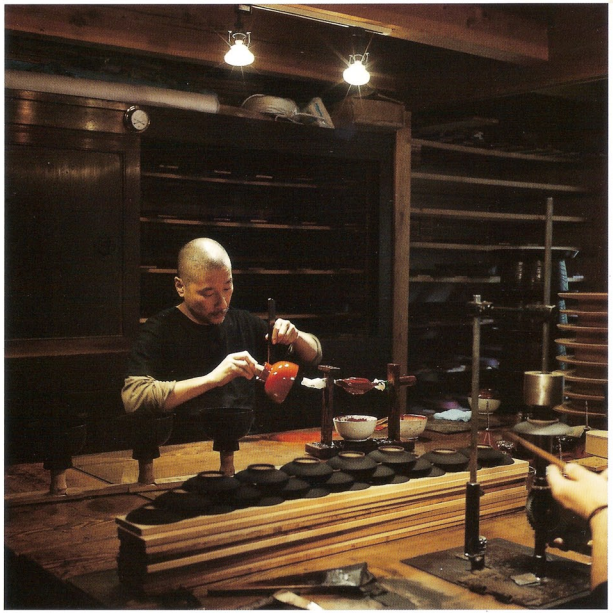
火つけ役はこの人、輪島の塗師です。

漆ブームの立役者｜その1
赤木明登

あかぎあきと　1962年生まれ。女性誌編集者を経て、88年に輪島市に移住。翌年から輪島塗の下地職人・岡本進に師事。94年独立。執筆活動もこなし著書に『美しいもの』（新潮社）、『漆 塗師物語』（文藝春秋）など。

椀
12,600円〜

右から／「地久椀（ちきゅうわん）」21,000円。「季椀（きわん）大」18,950円。「季椀 小」15,750円。「いろは椀」12,600円。どれも高い高台が特徴的。旧柳田村で作られていた合鹿椀がモチーフ。



自宅を兼ねた工房で、塗りを施す。1階で、主に下塗りを行い、仕上げの上塗りは、埃をシャットアウトした2階の専用工房で行う。

銅鑼鉢（どらばち）
73,500円

縁が真っ直ぐに立った浅めの鉢は、寺院で仏具として使われる銅鑼の形を模したもの。赤木の銅鑼鉢は、鉢としてだけでなく、写真のように裏返して皿のようにも使える。

●問合せ／桃居☎03・3797・4494